

第9期千葉県生涯学習審議会第1回会議及び  
平成23年度第3回千葉県社会教育委員会議 議事録

平成24年1月31日(火)  
午後2時から午後3時45分  
千葉県教育会館604会議室

出席委員(敬称略五十音順)

赤田 靖英	黒澤 真澄	坂井麻貴子	佐久間敦子
朱膳寺宏一	関 亮	高田 悦子	田邊 光子
福留 強			

出席事務局職員

千葉県教育庁教育振興部長	渡邊 清秋
千葉県教育庁教育振興部生涯学習課長	月岡 正美
さわやかちば県民プラザ所長	堀田 弘文
千葉県立中央図書館長	高石 卓
千葉県立西部図書館長	江澤 義夫
千葉県立東部図書館長	森田 幸三
教育振興部生涯学習課	
主幹兼学校・家庭・地域連携室長	篠原 和行
学校・家庭・地域連携室主幹	西沢 峯夫
同 副主幹	田中 憲生
主幹兼社会教育振興室長	浅岡 裕
社会教育振興室主幹	森本 豊
同 社会教育主事	鶴岡 敦、久我 康之
	山内 一浩、橋本由美子
葛南教育事務所 社会教育主事	篠崎 道成
東葛飾教育事務所社会教育主事	梅澤 一久
北総教育事務所 社会教育主事	山崎 民夫
東上総教育事務所社会教育主事	長谷川裕一、小幡 亮二
南房総教育事務所社会教育主事	高橋 政人、原 久雄

## 1 開 会

## 2 委員紹介、出席者紹介

## 3 委嘱状、辞令交付

## 4 教育委員会挨拶（渡邊 教育振興部長）

## 5 報 告

### （1）千葉県立図書館の今後の在り方について

事務局

この会議で審議していただいた「千葉県立図書館の今後の在り方」が、12月の定例教育委員会議で正式に決定したことを報告する。

## 6 議 事

### （1）議長等の選出について

〔事務局から選出方法について説明〕

- ・生涯学習審議会の会長、社会教育委員会議の議長は兼任とする。
- ・生涯学習審議会の副会長、社会教育委員会議の副議長は兼任とする。
- ・副会長の人数は規則に定めがなく、副議長は規則で2名となっていることに合わせ、2名とする。
- ・1年後に再度諮ることとするが、2年間継続とする。

以上を決定した後、

会長に 福留委員、副会長に 関委員、佐久間委員を選出した。

### （2）千葉県社会教育委員連絡協議会理事選出について

〔事務局から委員の任務について説明〕

朱膳寺委員、坂井委員を選出した。

### （3）千葉県の家庭教育支援について

〔資料を事務局から説明〕

議 長

事務局からの提案を受けて、質問、意見を求める。

委 員

家庭教育リーフレットについて、改訂とあるのは、大幅な修正なのか、「親学」を追加することになるのか。

事務局

統計データを改訂すること、「親の学び」を加えることを考えている。御意見があれば、他にも改訂する。

委員

新規に乳幼児版をつくる計画があるのは、良いことである。健診の機会に配布するという計画だが、それで十分に行き渡るだろうか。健診に行かない方の手にも届く、他の方法はないものか。

事務局

3歳児健診は必ず受診することになっているので、県の児童家庭課、市町村の関係部局と連携していきたいと考えている。

委員

小学生版、中学生版に読書のコーナーがあり良いことである。図書館と学校、幼稚園の連携が盛んで、図書館も忙しくなっている。県立図書館から市町村図書館へのバックアップもある。そこで、読書のコーナーは、誰が作成しているのか。今後の改訂には誰が関わっていくのか。

事務局

幼稚園、保育園の先生方、児童家庭課、子育て支援の関係者、生涯学習課から作成委員を選出する計画である。

委員

県内の図書館では児童奉仕の研究が進んでいるので、県立図書館の児童担当を中心に、公共図書館協会も加わっているので、県立中央図書館の担当者に相談すると参考になるフレーズなども出ると思う。

事務局

作成委員を決める参考にさせていただく。

委員

現在の小、中学生版は見やすくまとまっているが、「教育は親の責任」というインパクトがあっても良いのではないか。親が人任せ、学校任せになっている。警察に補導されても、親が迎えに行かず教員が行くことがある。教育の根幹は家庭教育であるが、親の責任の感じ方が希薄になっていることを危惧する。教育の責任は親だというインパクトのある表現をしても良いのではないか。

3歳児健診で配布するとのことだが、小さい時から親の意識として、責任を持たなければいけないと思ってもらうことに意義がある。ネット等の活用も更に充実していくと良い。

## 委員

質問だが、小学生、中学生には入学式にだけ配るのか。途中はどうするのか。改訂していくとのことだが、基本的な枠は変えていかないのか。

## 事務局

リーフレットの配布は入学時で、後は、各校に配布した「学校から発信する家庭教育支援」のCD版資料を活用してもらうことで、連続性を持たせている。

改訂については、大枠は変更しないが、御意見があれば参考にさせていただく。

## 委員

親の役割が前面に出ていない。質問項目にチェックするだけ。親の果たすべき役割について、県教委として、このようなことをやってほしいと注文をつけて良いのではないか。

## 事務局

リーフレットでは、子どものことが中心で親が確認するようになっているが、次年度は、「親の学び」についての役割を訴えたいと考えている。

リーフレットの中で親の役割について教育委員会として第一に大切と考えていることは、子どもたちに生活習慣を身に付けさせてほしいということである。次に、親子のコミュニケーションをしっかりと、子育てしてほしい。次に、家庭での学習・読書する習慣を身に付けさせてほしい。学校だけでなく家庭でもやってほしいこと。そして、地域と積極的に関わってほしいと考えている。親の役割、家庭の役割がいろいろある中で、このような特に大切なことを保護者に学んでもらうために、リーフレットを作っている。この会議で他にも求められている親の役割について、含めた方が良いという意見があれば、ぜひうかがいたい。

今、考えていることは、震災で、福島の子どもたちが全国から支援を受けた中で、自分たちは一人で生きているのではないと子どもたちが感じている。震災のことにふれて、子どもたちにあるいは親に向けて、リーフレットに記載した方が良い点があれば意見を出していただきたい。

## 委員

親になってから教えようとしてもなかなか受入れられない。高校では家庭科の時間等で子育て支援事業と連携したプログラムがあり、学校に乳幼児と親御さんが一緒に来てもらい、子育ての苦労を聞き、一緒に遊ぶ授業を行うことができる。これに参加する保護者は母子手帳にもきちんと記録していて、生徒は自分もこうして育てられたという実感を持つことができる。

母子手帳は良くできていて、子どもの発達をチェックしたり、子育てで取り越し苦労をしないで済むようにもなっている。また欄外のワンポイントアドバイスも参考になる。そこを記録したり読む親はその時点でどんな失敗をしたとしても、十分な親業をしている。

「親の学び」だけでなく、高校生のうちにどういう親になったらよいかを学ぶことが必要と考えている。「性教育」についても、出産と子育てと絡めて学ばせることで、命を育み育てることを意識させることができる。

教育委員会は良い資料を学校に配信しているが、それを各校でどう活用していくかが問題。小中学校の学級懇談会などで活用して、チェック項目を一緒にやっていると、教員に向いていたベクトルが、自分自身にも向けられる機会にもなり、有効である。

教育委員会として、学校に活用を指導していくことも大切である。

学校がやるのがもっとも効果的だし、やらなければいけないとも思う。

## 議 長

リーフレットを作っても活用の問題がある。PTA についても同様のことがいえる。来てほしい親が来てくれない。この資料も見てほしい親が見てくれない。これをどうするかは重要である。リーフレット単独ではなく、講座等と関連させていくことはできないか。

## 委 員

乳幼児版を3歳児健診で配布することについて。発達障害について親の理解があれば、子どもが早く改善できることがある。1歳児健診での配布も検討してほしい。1歳になると親が子の発達に疑問を持ち始める。その時、リーフレットが役立てられると良い。就学前の就学指導委員会でも早期の対応が話題になる。親の疑問に応えられるような、チェック項目を研究し、記載してほしい。赤ちゃんを産んでからの一年間の親、家族の不安は大きいので、この点での配慮もほしい。発達段階に応じたリーフレットの内容で、親の安心につながるよう期待する。

## 委 員

子どもの大学の入学時に、大学から保護者に3つのお願いを言われた。「大人として扱ってほしい。よく勉強させてほしい。健康で大学に通えるようにさせてほしい」と、大学の入学で、健康管理を親に求められた。しかし、それが求められる時代なのだと思う。

リーフレットには、よく目にする言葉や聞き慣れた言葉が並んでいる。転居を経験したが、どの県でも見聞きした言葉だ。「基本的な生活習慣」と書いてあるのは、それは親の責任だと読み取ってほしい意図だと考える。

## 委 員

「親力アップいきいき子育て広場」は、親子で使えるノートのようなもの、子育てに役立つもので、母子手帳の続きになるようなものがほしいと考えて作った。要所要所でチェックでき、学校の懇談会の話題になるものを紙ベースでと考えていたが、ツールの一つとしてインターネットを考えた。最近はケータイが有効なので、ケータイで見られる画面づくりを意識している。幼児と小学生、中学生の

部門に分かれているが、気になることがあれば、相談のページや他のサイトに行ってもらおうとか、地域で別のネットワークを作ってもらおうとか、近所の子育て仲間気づいてもらうことを考えた経緯がある。そこで、このリーフレットだが、これもツールの一つであって、子どもと一緒に読みながらコミュニケーションをとるでも良いし、学校の懇談会で利用してもらえばそれも良いと思う。

乳幼児については、就学前は幅が広くて、発達段階は一年でずいぶん違う。どこに絞ってリーフレットを作るかが難しい。ボリュームはこれぐらいが手頃なので、そう考えると、幼稚園入園の時期が適切かと思う。

子育て支援の立場から、生まれてから1歳半くらいまでは、子どもと一緒に家で過ごす時間が長く、子どものことが気になる時期であるので、健診にも来る割合が高い。母子保健推進委員が健診にあまり来ない家庭にも入っているケースがあるので、そういった方を通じてアプローチもできる。

家庭教育は親の責任、と言うのもわかるが、その言葉に押しつぶされそうになっている親もいるので、その加減が難しい。

## 委員

就学前の保護者に伝えたいことがたくさんある。2点、具体的に述べる。

保育園年長組の最後の保護者会に呼ばれた。不安をなくすための話をし、質問にも答えた。しかし、母親同士がかかわり、つながれば、あっという間に解決できることではないかと考え、話を参加者に振り向けたところ、3人の子を育てた母親が私よりずっと丁寧に答えた。就学前児のリーフレットに、親同士のコミュニケーションを大事にしていきたい。かかわり、つながりを生かせば、そのことが「親の学び」につながってくるのではないか。

認知の発達に関心がある。3歳から低学年までは、教える段階だとされ、善悪の判断をここで教える。良いこと、悪いことを教えたいが、ともすれば言葉で教えることになっていやしないか。子ども自身が、こうすると悲しい人がいる、いけないことなんだと、どのように心に染み渡っているのかを考えると、体験が足りないと思う。泥んこになるとか、雨にうたれる、友達とのかかわりについても、嫌な思いをする、けんかする、泣きじゃくる、そういった経験を大事にしたい。その経験が生きる力、自立につながっていくのだろう。その段階でしなければいけない体験をたっぷりさせてあげたいという思いから、リーフレットの「体験活動」をふくらませてほしい。

## 議長

専ら活用についての意見が出ていたが、内容についての意見があった。他には、いかがか。

## 委員

内容について、一番は親の意識改革である。発達段階に応じた親の在り方を学ぶ必要がある。そのために、家庭教育学級の講座を計画するよう指示している。

就学前は、市町村教委が責任を持つ。県教委は干渉はできないが指導はできる。

赤ちゃんを持つ親同士が自由に交流できるよう、東金青年の家で事業がもたれた。そのような施策も考えてはどうか。

## 委員

基本的な生活習慣について、次郎物語を書いた下村湖人が、家庭教育に関して、「家庭教育はそんなに難しいものではない。子どもは親のまねをするものだ。親さえしっかり生きていけばとやかく言われるものではない」ということを書いていた。家庭教育学級の行き着くところは、親としてしっかりしていないと子の手本にならない。それに気がつけば成功だが、それは毎回のテーマだ。子育てする上で、親の姿を見せる、それが基本だと話したことがある。

インターネット以外にも手段はたくさんある方が良いので、子育てについてのシリーズを新聞や雑誌、テレビでも取り上げてもらおうと良い。

## 議長

誰が読むのか、と言うのも気になる。誰に読ませるかという視点。親父の出番もあった方がよい。内容より方法論が中心なのではないか。発達には段階があるので、配布のタイミングが難しい。内容だけでは論じられない。そこで方法論が出てくる。ほめる、叱るが重要で、子ほめ条例のまち、というのがあり。地域全体で子どもを見ていないと絶対だめ。いい加減なほめ方はマイナスになる。みんなが子どもに関わっていないとほめられない。「ほめる、叱る」も加えてほしい。あるまちで親父の出番「わがまちで子どもが登れる木はどこにあるのか」というワークショップをやったことがある。

かつて、私も鹿児島県教委で資料を作ったことがあり、そのタイトルは「転んでも起こすな」「子どもはけんかで育つのだ」というもの。今では怒られるかもしれないが、「げんこつの与え方」も書いたことがある。立派なものを作っても、全国どこでも通じるものではつまらないのではないかと。千葉県らしさをどこで出せるかが重要、ここはお父さんだけ読むコーナーという工夫もおもしろい。

## 委員

保護者総会の講演会で、急遽話すことになり、タイトルを「私の子育て～すべて転んでつまずいて」として失敗談をデフォルメして話したところ好評だった。「こうすべきです」ばかりより、これは失敗でしたというのでもいいかもしれない。

聞いてもらいたい人、来てもらいたい人が、必ず行くところはと考えると、市役所などの給付金の窓口がある。子育て手当等の給付の前に、少し集めて短く話すとか、そこでリーフレットを配るとか、「記録をとっていくと、子どもの良い思い出になりますよ。これだけ一生懸命育てたんだよと話せますよ」などワンポイントで、アドバイスする仕掛けを作ることも良い。

委 員

チェックというのは毎年同じか。文科省とかのモデルケースはあるのか。(事務局「ない」) 子どもが親のチェックをすることがあっても良い。親の立場から子を見るばかりでなく、子の立場から親を見る、そういうことがあっても良い。「親の役割は何？」そういうスタイルも良い。

委 員

今、市内で親が授業を受けて子がそれを見る、という授業参観を提案している。立場を変えてみるというのは、意識を変えていくことでも良いと思う。

委 員

以前、道徳教育審議会で、子どもが、親が道徳の授業を受けているのを見ることを提案したが、同じ考えである。

議 長

孫育てという言葉が、市民権を得てきている。そういうことも意識してみると良い。

委 員

就学前児のリーフレットに期待している。先ほど、子どもの体験不足のことを言ったが、若いお母さんもやはり体験不足である。親自身、一緒に子育てを楽しむというコンセプトが根底にあると良い。子どもと一緒に遊ぶ、作る、読み聞かせる、笑う等、そういう親の体験が親の生き方を育む生涯学習と言うことでも良い。

議 長

あるテレビ局が、東京の女性と鹿児島女性約100人ずつに自分の似顔絵を描かせたところ、笑顔を描いたのは東京が3割、鹿児島が7割だった。千葉県で自画像を描かせたらどうなるのかと思った。

新しい「親の学習機会」に使えるテキストになると良いと期待している。

7 連 絡

8 閉 会